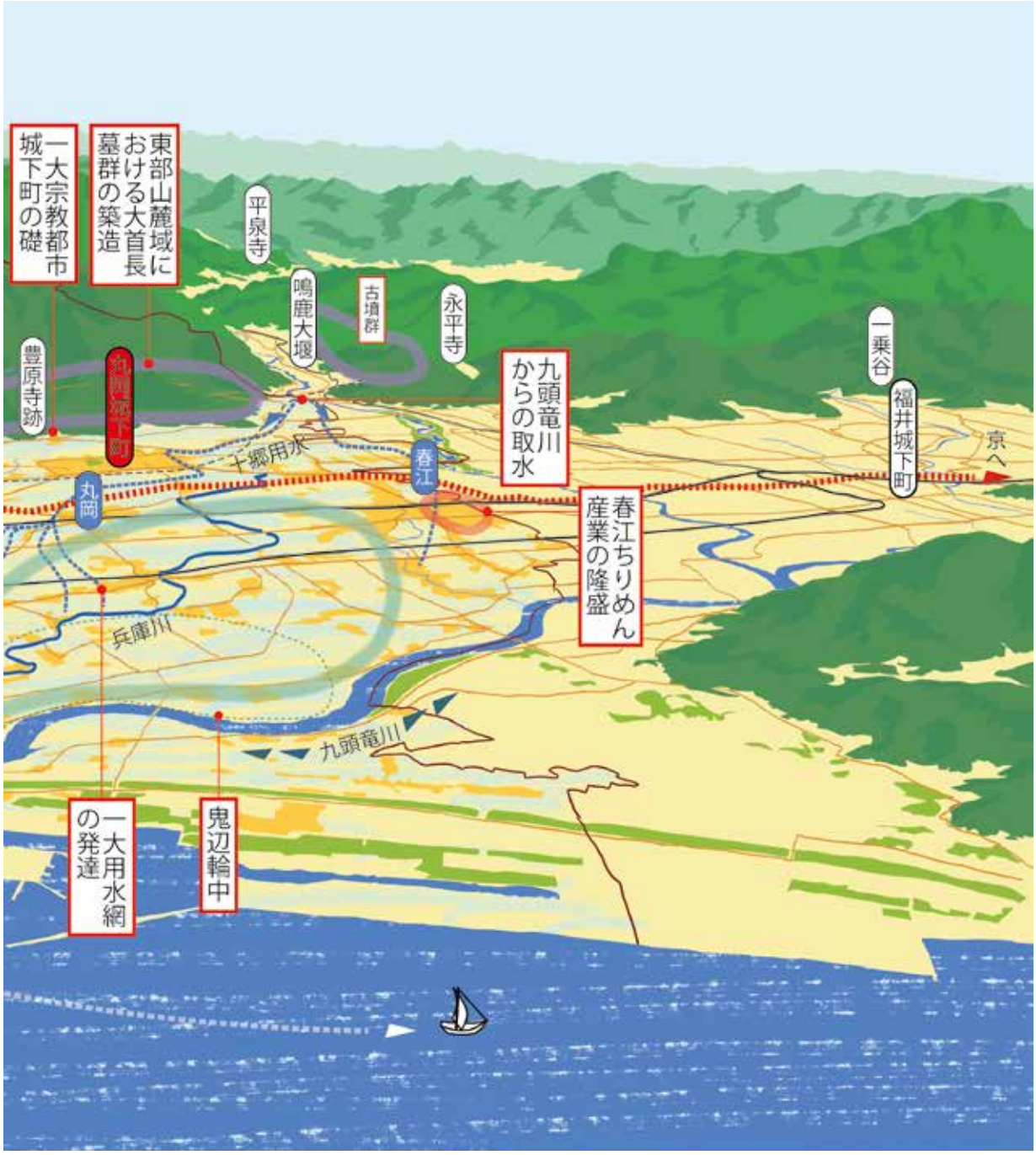
# 第3章　坂井市の歴史文化の特徴

# 1. 文化のみちが育んだ坂井市の歴史文化

**図 22 「文化のみち」を介して文化の吸収・醸成・伝播の装置となってきた坂井平野**

坂井市の歴史文化は、川や海、用水などの《**水のみち**》、街道や鉄道などの《**陸のみち**》（総称して「**文化のみち**」という。）を介して周辺の都市・地域の影響を吸収しながら醸成され、さらに湊を通じた交流・交易により日本海沿岸各地に伝播した。「文化のみち」は、本計画で設定する歴史文化のストーリーにおいても重要な骨格であり、これらを通じてつながる近隣地域との関係性の中で、坂井市の歴史文化の特徴はより鮮明に浮かび上がる。




**■笏谷石に象徴される坂井市の歴史文化**

こうした坂井市の歴史文化を象徴的に示すのが、「越前青石」とも言われる笏谷石であろう。福井市足羽山で採掘された笏谷石は、一説には継体天皇が発見し地域の産業として推奨したとされる。加工しやすい笏谷石は、古墳時代には石棺に使用され、本市の牛ヶ島石棺もそのひとつである。また、笏谷石は丸岡城天守の瓦にも用いられているほか、市内各地の社寺の石塔や狛犬、鳥居や墓石、民家や生垣の土台、土間や漬物石に至るまで、人々の暮らしの身近な空間にも幅広く使われており、各時代において坂井市域の歴史文化と密接に関係する文化財といえるとともに、今日においても地域の風景にとって重要な要素のひとつとなっている。

各時代を通じて人々の生活に欠かせない有用な石材であった笏谷石は、足羽川から日野川、九頭竜川を通じて三国湊へ運ばれ、北前船交易ではバラスト（重石）としても用いられ、交易先の各地にもたらされた。北海道から中国地方に至るまで、日本海沿岸各地にも笏谷石製の石造物が数多く遺されており、本市域が《**水のみち**》を通じてさまざまな交流・交易を展開した歴史文化をも象徴する存在である。

**写真 34　牛ヶ島石棺**
**（丸岡町霞町・丸岡城内で展示**
**緑石凝灰岩ともいわれる）**

**写真35　笏谷石製六重層塔**
**（信社王神社　春江町下小森）**

**写真 36　笏谷石の石畳**
**（三国町北本町・桜町）**

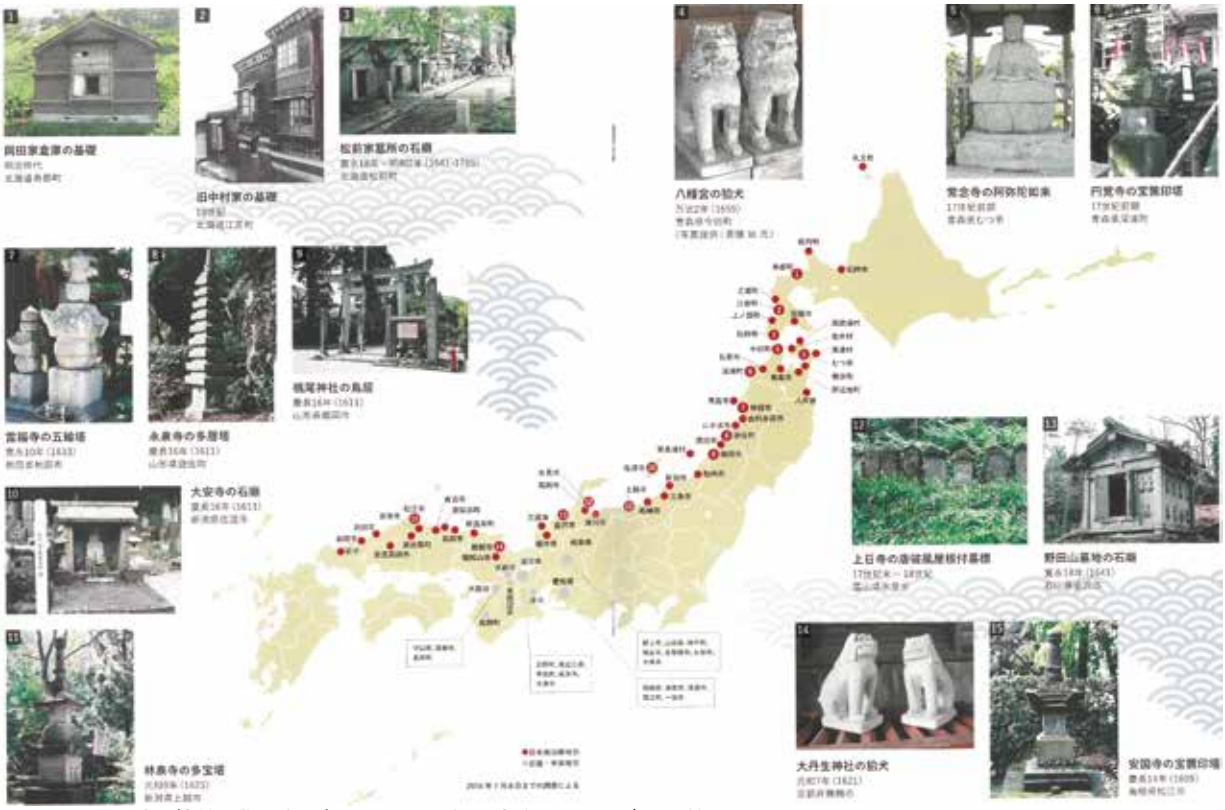



**図 23　三国湊（新保浦を含む）から日本海沿岸各地へ運ばれた笏谷石**
**（三井紀生氏作成・「第 24 回北前船フォーラム in 坂井市三國湊」資料より転載）**

## 2. 坂井市の歴史文化の大テーマと小テーマ

霊峰白山とその山系からの雪解け水は九頭竜川の流れとなり、長い年月をかけて氾濫を繰り返しながら扇状地を形成していった。その先に広がる坂井平野は、奥越の深山からの支流が平坦部に流れ出る鳴鹿から取水された用水によって潤され、今日「コシヒカリのふるさと」と呼ばれる県内随一の肥沃な穀倉地帯となった。古代・中世には奈良の興福寺兼春日神社領の広大な荘園があり、その名残として、現在でも坂井町やその周辺には春日神社が数多く存在している。

かつて潟湖であったとされるこの地は、継体天皇によって九頭竜川河口の開削が行われ、舟運や灌漑の便がはかられたと伝わっている。北陸最大級の前方後円墳・六呂瀬山古墳群をはじめとする大首長墓群が、対岸の松岡古墳群とともに九頭竜川を眼下として坂井平野を一望する東部山麓域に築造されたことは、越の国の中枢としてこの地が重要な位置を占めたことの証左である。

九頭竜川が日本海に注ぐ河口にできた湊町・三国湊は、越前各地の荘園貢納物が集積し、中世には三津七湊のひとつに数えられるほど日本海沿岸の流通の拠点として発展した。近世には福井藩の保護のもとで有力な廻船業者が輩出し、とりわけ近世末から近代初期には北前船による交易の繁栄により、宗教美術や工芸、文芸や祭礼などの多様な歴史文化がうみだされた。近代には、物流は舟運から鉄道にその主役を替え、坂井市域には春江ちりめんや丸岡町で盛んとなった細巾織物など、繊維産業の発展を支えた。

中世には、白山を開いたとされる泰澄大師によって開基された豊原寺が「豊原三千坊」と称されるほどの繁栄をみせたが、一向一揆勢を掃討した織田信長により焼き払われた。その後、

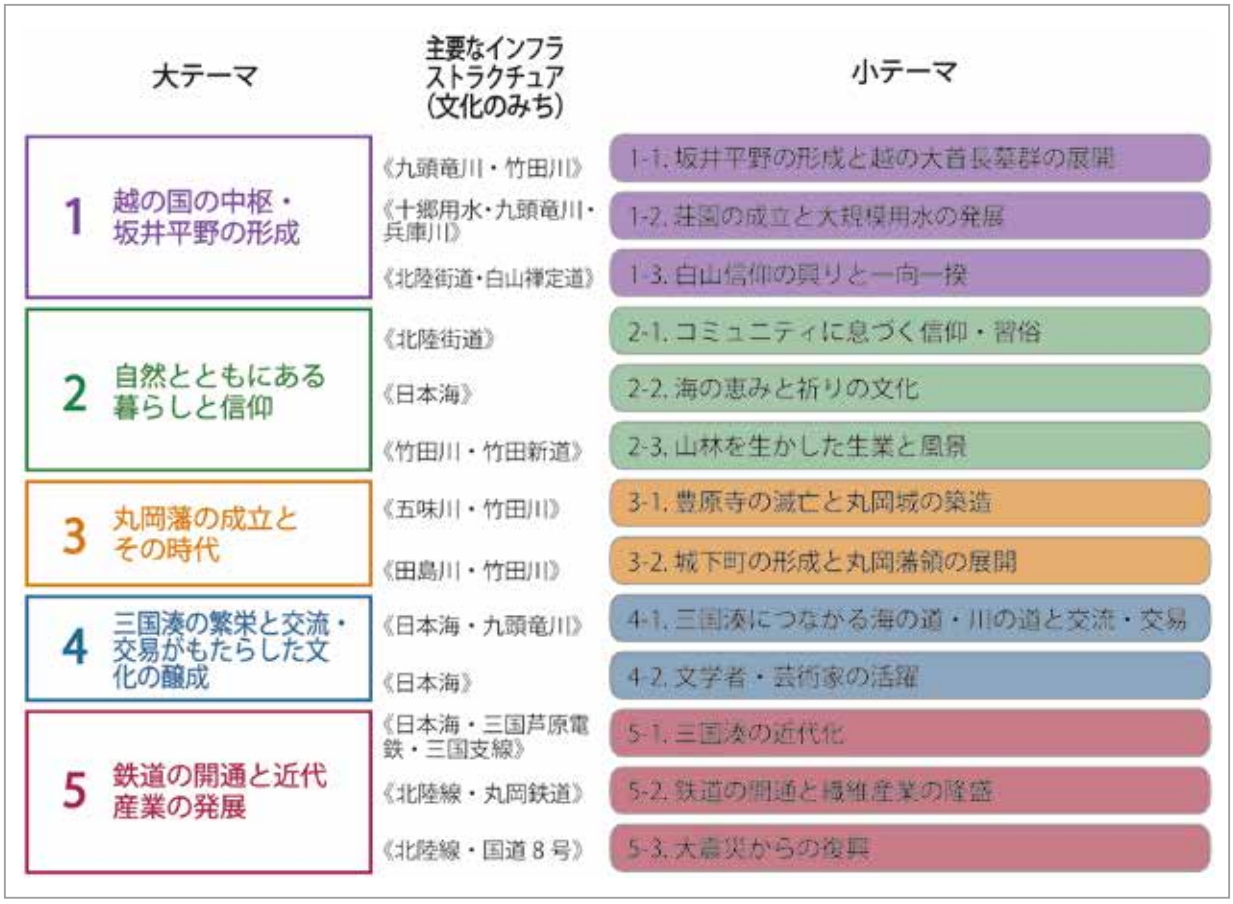



**図 24　坂井市の歴史文化の大テーマと小テーマ**

信長から越前国の大部分を与えられた柴田勝家の甥・勝豊が豊原に駐留し、ほどなく居城を丸岡に移したことが、城下町形成の礎となった。

そして、東に加越山地、西に日本海を擁する坂井市域には、唯一の中山間地域である竹田地区の山村文化と、神の島･雄島を抱く海の恵みと信仰とともにある漁村文化が息づいている。海運従事者の多かった雄島安島集落に伝わる盆踊り唄･「なんぼや踊り唄」は、東北地方から伝わったとされ、こうした民俗文化にも、日本海を通じた交流の痕跡を見出すことができる。両地域に挟まれる平野部は穀倉地帯であると同時に織田信長によって一掃されたとみられた真宗門徒の深い宗教信に基づくコミュニティーが育まれ、その歴史も息づいている。

こうした坂井市の歴史文化の特徴を、５つの大テーマと 13 の小テーマに分類し、それぞれのテーマにおいて主要な役割を果たした「**文化のみち**」と合わせて図 24 に整理した。

## ①大テーマ１：越の国の中枢・坂井平野の形成

### 1-1　坂井平野の形成と越の大首長墓群の展開

坂井市域には、三国町に旧石器時代、各町で縄文時代の遺跡が確認されており、さらに弥生時代遺跡として坂井兵庫地区や春江町井向、三国町加戸下屋敷などから集落跡や土器、銅鐸が発見されており、潟湖後背地や自然堤防上に集落が次々と形成されていったことがわかる。そして、古代における坂井市域の最初の歴史的ハイライトと言えるのが古墳時代である。

丸岡町の東部山麓、低丘陵上の広範囲にわたって帯状に古墳群が分布するが、なかでも卓越した規模を誇るのが東日本の日本海側最大級の古墳である六呂瀬山古墳群である。対岸の松岡古墳群（永平寺町）と並び、眼下に九頭竜川が形成した坂井平野を一望できるこの古墳群からは、当地域を支配下に置いた越前最高位の勢力の存在を見て取れる。さらに、椀貸山

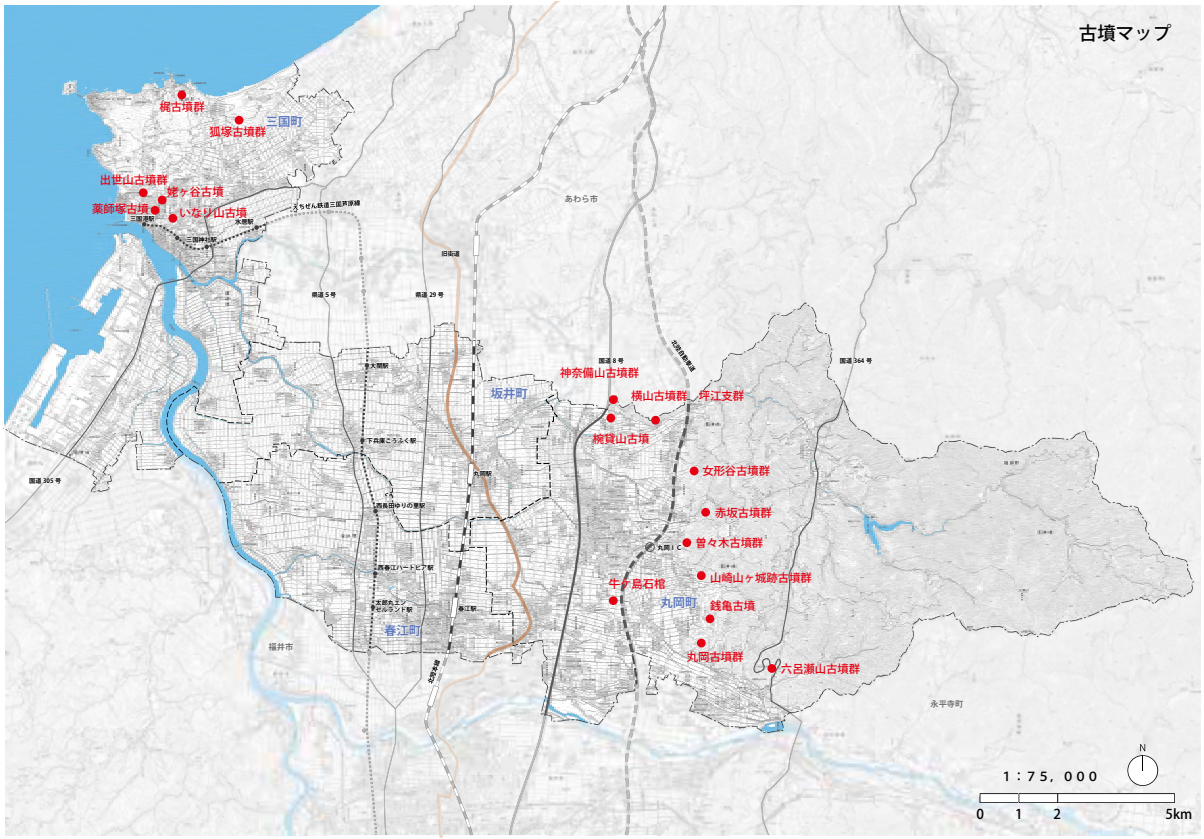



**図 25　坂井市域における古墳分布（令和元年度古墳群分布特性把握調査をもとに作成）**

古墳に代表される横山古墳群が、あわら市域の数多くの古墳とともに、当地域の力量と重要性を象徴する存在となっている。また、三国町の北部沿岸域には、日本海を強く意識した立地に河口部に睨みを利かせるように古墳群が立地し、平野部と海上交通の接点としての重要性を物語る。

この地に登場したのが、近江で生まれ越前で育ったとされ、当地の資源と生産力、そして類稀な対外交渉力を背景に強勢を誇った男大迹王（おほどのおう）（のちの継体天皇）である。古墳時代の歴代の王たちによる統治は、継体天皇によって九頭竜川河口の開削が行われ、かつて潟湖であった坂井平野の沼沢地の洪水対策、稲作の発展、舟運の便がはかられたという伝承となって今日に伝わっている。また、本市域には、継体天皇やその母・振媛のゆかりの地が多数伝わっており、その多くがかつての水上交通の要衝に立地している。

## 1-2　荘園の成立と大規模用水の発展

坂井平野には、奈良の興福寺や東大寺の荘園が形成され、河口荘十郷、坪江荘園は「北国荘園」とも称され、興福寺所領の荘園として大和国以外で最大規模を誇った。河口荘十郷の村々を灌漑するために設けられたのが鳴鹿大堰であり、そこから取水された用水は十郷用水と呼ばれた。磯部・高椋・新江と分流され、坂井平野の大動脈としてこの地を潤してきた十郷用水は県内最大規模の用水で、平成 28（2016）年に全面パイプライン化されたが、「千年水路」として一大穀倉地帯の形成に寄与してきた。下兵庫や東荒井などの河口荘十郷には春日明神が勧請され、現在も各集落に春日神社が所在する。

九頭竜川をはじめ兵庫川、竹田川などの河川は、恵みだけでなく、度重なる氾濫により時には水害をもたらした。とりわけ九頭竜川と兵庫川に挟まれた「鬼辺郷（きべ）」では、古代から近

図 26　十郷用水絵図（福井県文書館所蔵）

写真 37　田の神を祀る合葉神社（坂井町島）。
春日神社境内にある笏谷石製の小祠

図 27　鬼辺輪中絵図（井上正也氏所蔵）
貞享 2（1685）年頃のものと推定

世にかけて輪中（わじゅう）が形成された。人々は自然と共生しながら、水の恵みや田の神への感謝、五穀豊穣への祈りを捧げてきた。こうした信仰は、稲作文化に関わるさまざまな祭礼行事として市内各地に伝わっている。

### 1-3　白山信仰の興りと一向一揆

奈良時代には、霊峰白山を開いた泰澄大師によって豊原寺が創建されたとされる。数多くの僧侶や職人が居住した豊原寺は、その卓越した経済力・軍事力から、中世には同じ越前にある平泉寺と並び称されるほどの一大宗教都市として繁栄し、のちに「豊原三千坊」ともいわれている。豊原寺から榎峠を経由して竹田、吉谷寺へ至る道は、白山への道のひとつである。しかし、戦国末期には一向一揆勢を掃討した織田信長により寺坊はことごとく焼き払われた。泰澄や白山信仰関係の寺社として、丸岡町吉谷の吉谷寺や三国湊の白山千手寺などがあったが、いずれも一向一揆により廃絶した。なお、室町時代には豊原は美酒の名産地として有名であり、また江戸時代の「豊原素麺」は、丸岡を代表する産物であった。

## ②大テーマ２：自然とともにある暮らしと信仰

### 2-1　コミュニティに息づく信仰・習俗

京都・奈良に近く、南北に北陸街道が貫き、三国湊を通じて日本海沿岸各地と結びついた坂井平野には、古来の白山信仰に加えて、鎌倉時代以降に日本列島各地で起こった宗教界の新たな動きがもたらされ、重層的で多様な信仰、習俗が根づくこととなった。交通の要所には時宗が進出し、また同時期に真宗諸派も坂井平野に進出した。室町時代には、吉崎を拠点とした蓮如の精力的な教化により、真宗の本願寺教団が勢力を拡大した。

こうした神事や祭礼・講などは、市内全域で広く営まれており、現在も地域のコミュニティの基層になっている。とりわけ、「真宗王国」と称されるように、集落単位での真宗の講や仏事、秋の報恩講などが大切にされており、かつて蓮如が北陸道を通ったという伝承から、京都の東本願寺から吉崎まで蓮如の御影が運ばれる蓮如上人御影道中の立寄り所など、蓮如ゆかりの歴史文化が継承されている。

写真 38　左義長床飾り（丸岡町上田町）

写真 39　伊伎神社の左義長（三国町池上）

写真 40　歳徳神祭礼（三国町南本町・松ケ下）

## 2-2 海の恵みと祈りの文化

古代から海上守護の神として雄島とともに信仰の対象となってきた大湊神社は式内社であり、かつて広範な神領を有していた。雄島地区のなかでも大湊神社の所在する安島をはじめ崎浦・梶浦は「三ヶ浦」と呼ばれる岬端集落で、先史時代からの歴史を有する。近世までは、岬端性磯浜漁業と交易労務を主要な生業とし、北前船の時代には男衆は三国湊の船頭や水主として活躍し、豪商が所有する船の船頭・水主から、有力な船主となった者もいた。女衆は、ワカメやウニなどの海女漁で生計を立て、規模は縮小しているものの今日も海女の素潜り漁が各集落で行われている。

雄島地区には、大湊神社の祭礼をはじめ、北前船の船乗りが伝えたとされる民謡「なんぼや」や「モッコ」と呼ばれる刺子の着物など、海とともにある暮らしの中に特有の歴史文化が息づいている。

写真 41　大湊神社例祭（三国町安島）

写真 42　雄島地区の海女漁の風景

## 2-3 山林を生かした生業と風景

丈競山や火燈山（ひともしやま）などの山々に囲まれ、盆地状に開けた竹田地区は、坂井市内唯一の中山間地域であり、豊原寺、小野寺とともに白山信仰の拠点となった吉谷寺を中心に栄えた。400年の歴史を持つ県内最古の住宅である「千古の家」（坪川家住宅）が往時の姿を今に伝える。竹田は、榎峠を越え、豊原を経る道で坂井平野とつながっており、ゆたかな山林資源を生かし、木炭の生産や銅山の開発などが行われてきた。坂井市の水がめである龍ヶ鼻ダムを水源とする竹田川が地区を貫き、加賀文化の影響を色濃く伝える赤瓦屋根の民家群とともに、竹田地区特有の集落風景をつくり出している。

写真 43　竹田地区の集落風景

## ③大テーマ３：丸岡藩の成立とその時代

### 3-1 豊原寺の滅亡と丸岡城の築造

天正３（1575）年、豊原寺を焼き払った信長により越前国の大部分を与えられた柴田勝家の甥・勝豊は、豊原に駐留したのち西方の小丘・丸岡に居城を築いた。それに伴って寺社や職人らも丸岡に移っており、江戸時代以降の丸岡城下の寺社や職人にも、かつて豊原に居住していたとの由緒をもつものは多く、豊原ゆかりと伝える仏像なども残っており、豊原寺が丸岡城下町の礎となったことがわかる。

丸岡城は、寛永元（1624）年の丸岡藩成立以降は、丸岡藩主の居城となった。国内唯一の石瓦葺の天守であり、市民からは「お天守」と呼ばれ親しまれている。近年の総合調査の結果から、寛永年間の創建当初は柿葺きの天守であったことや、一部板戸の部材に東北地方産のヒバ材が使用されていることなどといった貴重な事実が明らかになっている。

写真 44　國神神社（丸岡町石城戸町）

写真 45　安楽寺　十一面観音菩薩立像
（丸岡町石城戸町・中石城戸）

### 3-2 城下町の形成と丸岡藩領の展開

独立丘陵を利用して形成された丸岡城郭とそれをとりまく城下町は、田島川を外堀として利用するなど自然地形を巧みに利用して整備された。城下の寺院群のなかには、藩成立時の藩主であった本多氏ゆかりの本光院や、本多氏の改易後日向国延岡から入府した有馬氏が延岡から連れてきた高岳寺、台雲寺、白道寺といった歴代丸岡藩主ゆかりの寺院がある。さらに、

写真 46　有馬家歴代墓所
（高岳寺・丸岡町篠岡）

写真 47　日向神楽

有馬氏が延岡から随行した舞人に祭礼で奉納させたことに由来する日向神楽が今日に伝承されている。

丸岡藩は、領内唯一の外港として三国の滝谷出村の九頭竜川河岸に米蔵や茶屋などを設け発展をはかった。港の権益をめぐって福井藩領・三国湊と激しく争った滝谷出村では、丸岡藩ゆかりの寺院や花街の名残が往時の歴史文化を今に伝えている。また、幕末には丸岡藩領の三国の梶浦に砲台を整備した。

写真 48　丸岡藩砲台跡（三国町梶）

### ④大テーマ４：三国湊の繁栄と交流・交易がもたらした文化の醸成

### 4-1 三国湊につながる海のみち・川のみちと交流・交易

九頭竜川が日本海に注ぐ河口にできた湊町・三国湊には、古代から越前各地の荘園貢納物が集積し、中世には三津七湊のひとつに数えられるほど日本海沿岸の流通の拠点として発展した。近世には福井藩の外港として、藩の保護のもとで有力な廻船業者が輩出し、とりわけ近世末から近代初期には北前船による交易の繁栄により、工芸や芸能、文芸も発展し、町人文化が開花した。

森田家や内田家、三国家（森家）といった有力商人は、港の自治などで指導力を発揮するとともに、工芸職人の援助や寺社の運営負担を通して、町人文化の向上にも貢献した。こうした町人文化は、300 年以上の歴史を有する山王宮の祭礼（三国祭）にも結集されているといえる。今日残る山車屋台や水引幕からは、幕末から明治時代にかけての職人による爛熟した工芸技術を知ることができる。また、三国箪笥や三国仏壇、三国焼といったさまざまな工芸品が生み出された。

写真 49　越前三国湊風景之図（一部）（慶応元年）

写真 50　三國神社例大祭（三国祭）と山車屋台

## 4-2 文学者・芸術家の活躍

近世には、有力商人のたしなみとして俳諧が流行し、松尾芭蕉の弟子・各務支考（かがみしこう）が三国を訪れたことを契機に、材木商の岸名昨嚢（きしなさくのう）を初代に日和山吟社が結成され、金鳳寺（きんぽうじ）で俳人たちによる句会が催された。昭和 19（1944）年、疎開のため三好達治が三国に寄寓し、その後三好の影響により則武三雄（のりたけかずお）、中野重治など多くの作家がこの地に集い文学の隆盛をもたらすこととなるが、日和山吟社はその素地となったといえる。終戦後には地元の人々が原動力となって文学サロン・三国地方文化協会が結成され、機関誌『三国文化』の発行、外国文化を摂取した催事の開催など、さまざまな活動が展開され、三国は文学のまちとしても知られるようになった。

文学者らが愛した自然風景や町並みは、多くの芸術家をも惹きつけた。特に、景勝地である東尋坊や雄島は、近代に多くの絵画作品として描写された。

写真 51　日和山（金鳳寺境内　三国町北本町･日和山）

写真 52　東尋坊と雄島

## ⑤大テーマ５：鉄道の開通と近代産業の発展

## 5-1 三国湊の近代化

日本海側有数の港町として繁栄した三国湊であるが、近世末には上流から流れる土砂の堆積により河口が閉塞し、毎年のように河川が氾濫し船の出入りも困難となっていた。明治元（1868）年の洪水は竹田川沿いの村々に大きな被害をもたらした。地元の有力商人らからの強い嘆願を受けて、明治 9（1876）年明治政府から招聘されたオランダ人技師 G･A･エッセルは、

写真 53　三国港（旧阪井港）突堤工事の様子

写真 54　龍翔小学校

河口右岸に突堤を築く計画を立案した。この計画はエッセル帰国後デ・レーケに引き継がれ、明治 15（1882）年に竣工した。この工事には、粗朶沈床（そだちんしょう）による工法が採用され、東尋坊一帯や雄島から採取した岩石が用いられた。しかし、三国は明治 30（1897）年に開通した福井 - 小松間の北陸本線ルートから外れ、舟運から陸運に取って替わられた明治後期以降、三国の商業は衰退していった。一方、大正期には底引網漁業が開始され、三国は商港から漁港へと転換していった。

近代に入ってからも、三国湊では豪商らの富を背景に龍翔小学校や旧森田銀行本店などの建築物が町並みに新たな彩りをもたらした。

## 5-2 鉄道の開通と繊維産業の隆盛

明治 30（1897）年の北陸本線の開通で主要ルートから外れた三国や芦原の経済界有志らは、明治 44（1911）年北陸線の金津と三国港を結ぶ海陸連絡線としての三国支線を開通させた。また、同様に北陸本線から外れた旧丸岡城下町の有志らは、上新庄（現・JR 丸岡駅）と丸岡市街を結ぶ軽便鉄道・丸岡鉄道を大正 4（1915）年に開業した。さらに、大正 8（1919）年に計画された加越電気鉄道は、福井市や春江町など絹織物が盛んな地域と三国港を直結することを企図した。加越電気鉄道とそれを引き継いだ吉崎電気鉄道は幻に終わったが、この三国と福井を結ぶ鉄道敷設計画は、三国芦原電鉄によってようやく実現した。昭和 3（1928）年には福井口 - 芦原間が、翌昭和 4 年には芦原 - 三国間が開通している。これが現在のえちぜん鉄道（旧京福電鉄）三国芦原線である。

鉄道の整備に加え、道路の整備、九頭竜川への架橋といった交通体系の近代化は、春江や丸岡の繊維産業をはじめ、海産物や農産物の流通効率をも向上させ、近代産業の発展を促進した。とりわけ、大正時代後期から昭和時代初期にかけて、絹織物・ちりめんは県内一の生産額を誇り、裏地用としては全国生産の約 7 割を占めるに至るほど、春江の機業の隆盛は顕著であった。

**写真 55　眼鏡橋（三国町宿）**

**写真 56　朝一番の京福電車で行商に向かう「ボテさん」たち（千木英一氏　撮影）**

## 5-3 大震災からの復興

昭和 23（1948）年 6 月 28 日、丸岡町付近を震源とするマグニチュード 7.1 の地震が発生し、市域の広範囲に大規模な被害をもたらした。とりわけ被害が甚大であった丸岡町や春江町では、ほぼ全戸が倒壊した他、火災の発生した地区も少なくない。

丸岡城天守は、石垣もろとも崩れ落ちたが、昭和 15（1940）年から同 17（1942）年に実施された解体修理工事の際の記録や写真、図面をもとに修理復興が行われた。三国町域では地震による建物の被害は他町村に比べて少なく、歴史的建造物や町並みが喪失を免れた。